夜嵐お鬼奴
花廼仇夢
芳川伝雄閣
岡本勘
水島孟齋
金松豊祥
四編中
四編下
へ14
2689
10
へ14
2689
11
へ14
2689
12

夜嵐於鬼奴
花迺仇夢
芳川夜雄閣
四編上
へ14
2689
10

特
八14
2689
10

夜嵐

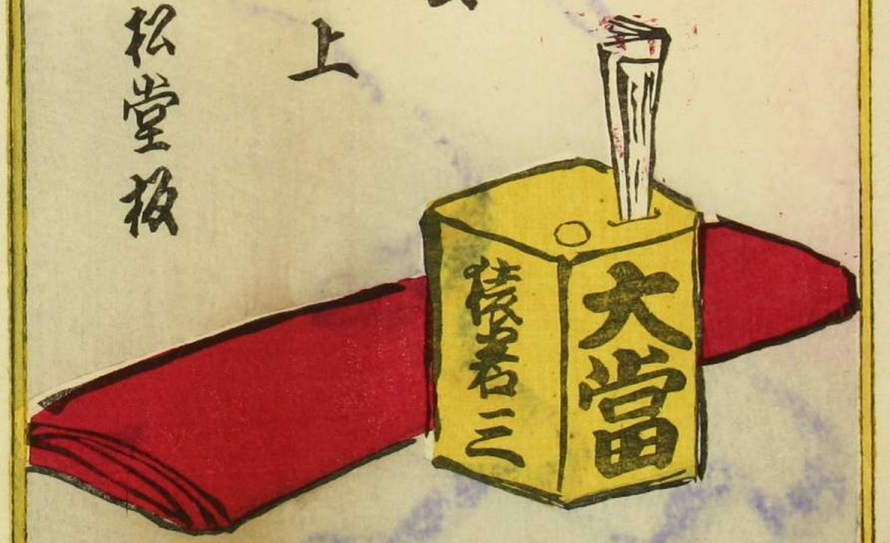
かきあ

花の仇浪

正編上

芳川俊旅園
岡本勘造撰
永島孟彩画

金松堂板



おひとりめの花の色里と八幡宮ちかき花巻が問よ答へ隅川の欲「色」ゆゑ「こそ命さへ」と八幡の御ゑの通り文句色々ゆゑ多分と葉さ衣の深山ぶり早四編めひて御好ち嵐嶽をスワト當世市川の圓にくの〳〵と形をつくり此回ら深山して後一編よ寄せて利然榮名御覧よへる色ば見れ一番満尾まで見て御ら御ん稼へと元云文ろの日ゝ本組孟ほ本屋のま間取の後は迄と延して物はたくの早く〳〵の催促にア年ち返辞もコンヤと切迫眠ら紀眠よシシシと実強形まへ仕事乃ハケ法いでよへラぞを叩いて作文よかゝ

明治十一年十月下旬

岡本勘造誌

竹次郎
三次兵衛

四郎吉
於吉

黒林玄達改
小林金平

○閑やらう夜の
嵐い淋とそ
も知らねど
野の秋面ふ散しく
花ゆあらうろ
悪事も人
い知るまと
化所の嘆きと
かてうろ風報ひの
形くを身ひも

孟行笠

▲めぐろうく
車井の底の暗うろうとち
に沒とる邑とあふつみ

つぎ
おきぬのおさとの小
姿姉と花し夜叉姫ちうて
何気なく南方の側へ進ませいで
今日はおさとさんとまひは記者さ面
清りしゝう男ふまりけて
南方
小姓
だゞ今多
小竹注帯
と云清
さんが
ふるて
ら羽
織で

家相がよろく
夫放あるがこと面さと
いひ移らんと左様さとけり
南方帯
四
南方帯オヽ
巴帯者う先き
仕ひと出ぶ
十二藤帯であつたら
来ると左様とを
大層あいとあつて
お使ゆがあるので
南方
今度
今日
南方

つゞき

あきれ人
離縁の
ぬ〜と
あなたの心
と思ひ合
し〜と勇ましく
の形しを勇ましい
はなうとあきれ
とあきれと

▼縁切榎の利益

一同に指さす火
界の呼〜と
幕を移〜
ゐるとこ
見ゞ

▼三人
切れる合
ことを

●安方ゞまり
ゐるとゞ
の

徳兵衛と改る

勇ましい角力
体を愛
の若い男
一丈勇ましい
ふ丈勇ましい
急ぎひとそ
ゐ宅の

△今一人の
下女
お
お酒者
の社
皆
安

つぎ　一敵と傾城を取立ての事きゝあてゝ
さとくに逃るが如く絶則小梅の家をとゝ
今度悪魔を拵ひ心地〜
おへんとゝ小次のうめと培の姫の
おきゝ二度までもおへんの老
雛を救ひ神〜と
心をとゝ〜くる
祝切の感ぶ色
とゝ止めておきし
出へと浮〜竹に節〜
お淡〜と芸者小家を持せ
南さが嫌人とうておきをめあわせ
兼ての望を遂させおへんぶ冊のおきゝ

てお芳ふ
うらねば角をへ
☒
荷物もかゝ
うらねば勇
注帝
と
牡丹
きや
小谷

強止がくて南去小梅の家を引払ひ松坂やの
後丸を去るこめ同家〜引移りおへんぶすあで
小久小社宮を引せ姫〜所〜家を求め
て次兵衛と共に安小伝を呼び
小社宮て祝〜く実る周彼の事
去小十四才の同金比羅参りにて
家出せ〜こ小兵衛の実子去るるゆが判の十九
年ぶりにて牧子の対面を図お去徳共姫江町の
小久の家〜引移り牧子小久小伝の後ろ文小義会おき
ゆ年ぶりの四七義〜こる後の世〜い出れどもおきゆの
ゆ年の紀の方小伝器〜て去小の世す○加て続く
おきゆの通り事故もく強ゆ紀角の方を離縁と
なり〜ふ義て拵出〜垂る今報を引の小物と己が
☒
妾若町小左衛
門の妾若
と買入
て伝
夢
れ
と
夫の
如く宅へおきゆよと
共にあすこもおく蔓
るゆ者ぶ代ロと
つぎ

「つぎ送り」の道は世間絶うるあらば
徳川殿家の滅亡を改捨と
名付（返上之）のうたは新たなる
巻之後四慶安の一月後へ
つぎ送りの戦乱起り巻之
五へ引き続き所の外絶の
「ひろい」の府柳川の軍と大坂
督と」天軍関東（下向
あらくるよう徳川家委代
我顔の縁下に家人の也く心ある者
を家の滅亡を嘆り生不交不義
反軍を逐退せんのと殊儀一揆
起て戦乱を企めるの中の上野東叡

山（集り）徳川家の面々は彰義隊と唱
動しあるとの反軍は今日
戦乱は及ばんと手を揮換あるよう
市中の人々安堵の心
なりて眠
る者もちらほら世は関係
なく
廿子名夕数深のもんと
しぎ勇ん弟が仇の藤つ兵外
寒の夜の夢ばれど仇細を云わば大
者る婦人の出床ものを
五月五の節句晴れ山の樹木は杜宇只一聲の青葉
とぬ世のあれと勇ん弟五月十四日の夜の九つ時表の格子と
ひらき
手まれと綾ぬ

[illegible]

銅版開化玉編　全　島田豊三郎編

開化女用文章　全

深寄延房編輯　近世紀聞　初編より九編迄出板　以下追々要見　鮮齋永濯画

畜業二編輯　小学　取引要文　全

義烈回天百首　全　千蔭永濯画

金花七變化　魯文作　國貞画

西野古海編輯　新撰　東京全圖　全

濡衣女鳴神　秀賀作　國貞画

文　地本錦繪　問屋

出版御届明治十年九月廿一日第六大区一小区深川富岡門前町六十番地　編輯人　岡本勘造

第一大区十三小区四横山町三丁目二番地　出版人　辻岡文助

へ14
2689
11

（蔵書印）

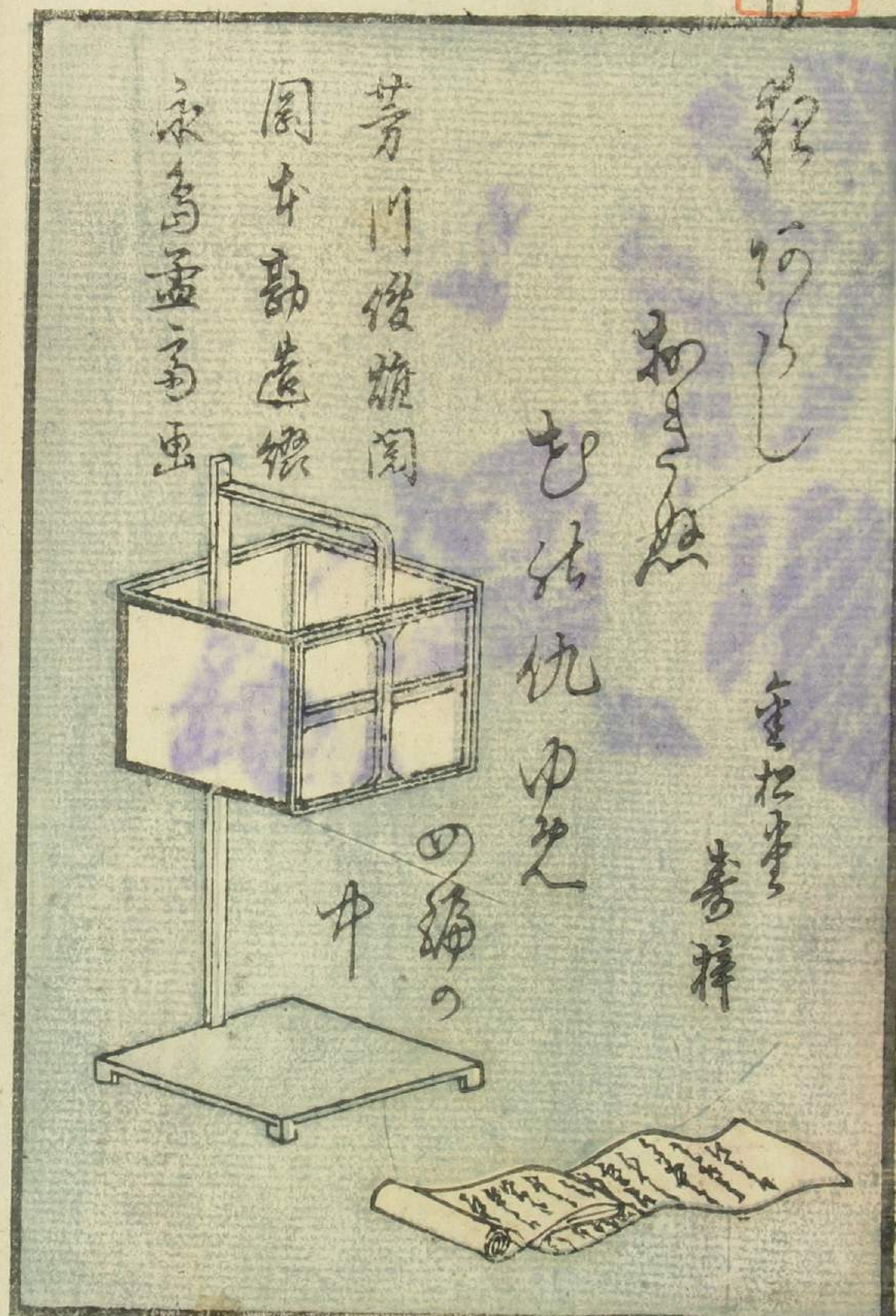
上のつゞき

他言致すべきものにあらねど是迄の恩をはなり内々お紺に申には猶更恩めく他人へは洩しあまる途では為にならぬと申し上げ義理と人ども両者ぎは深くあらく此のどくみはめでくれし」と涙絞りし只忙然と深息をつくばかりなり

▲撰かけ持て返るは風呂敷包を手に納めたる金子二十五両と書付けの上は五十両と云ふ事の約束の金のうち二十五両を

つぎへ

へ 14
2689
11



つぎ
◐ 次の傾骨とお捨きこりく
アット一数叫びて走
びごろと倒れて死
きくびに赤空を抱
も若くに
ろ
側
きろ
ハ
ぬ
き
お
ろ
招板
招板

世がいくらの
急あの
痛まり
いかれ
せんとあ
今は我身の
待ち
二十五
この死
さかり
戻
立
紀
次へ
殺と引配
次へ

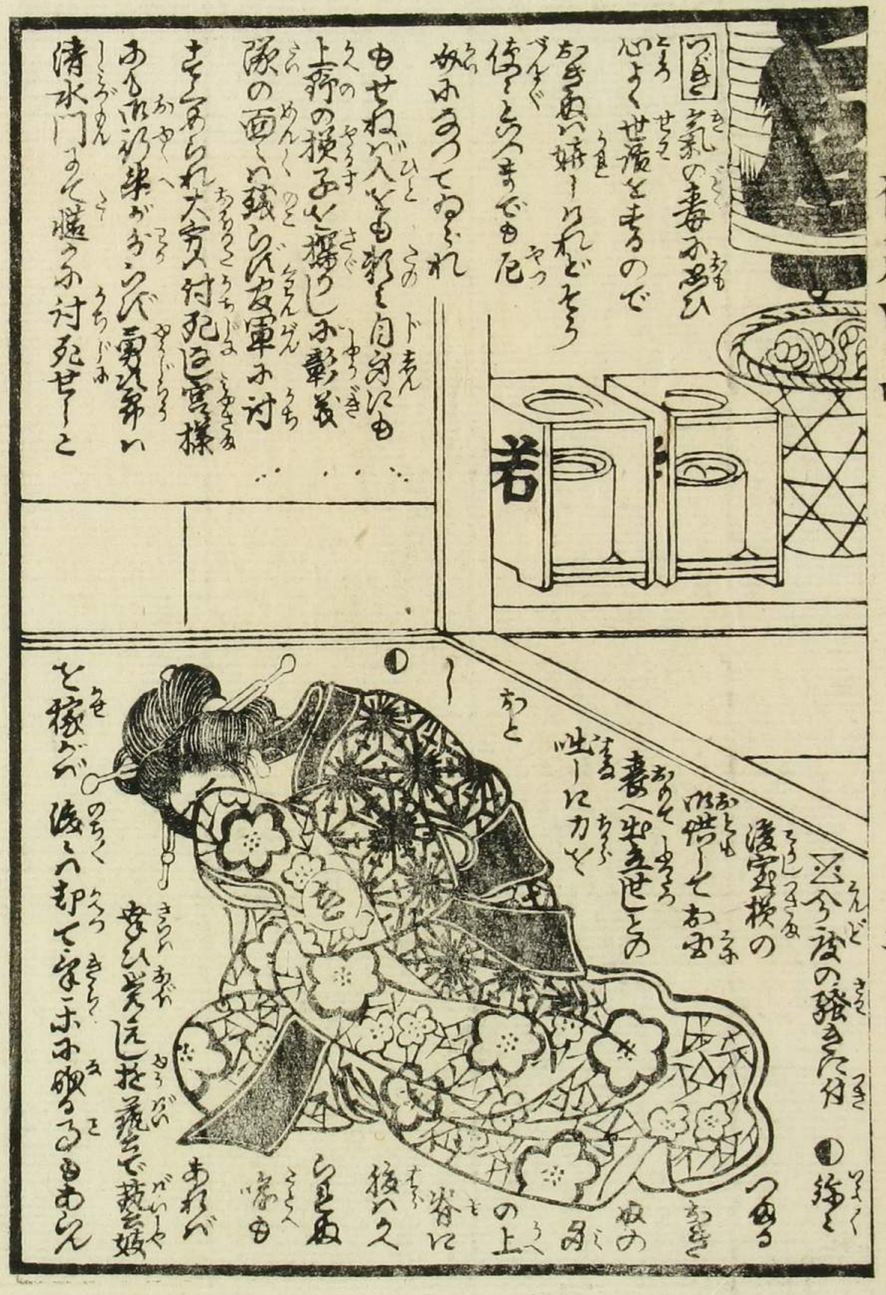
その
懐中へ
を入て

胴巻の
金をとれん
とする時おさよ
がハツと眼をえ
開き服めしをうに
おきぬの帯をえ
つめ引ぬきとれい
ちつぐ対を編め縛と
臣るを引に又もズトン
と一発の鉄砲ぬが側へ来る松の
樹木中をとをすく ホツリ折し
大枝おきぬの上へ落うるホモいろう
しく張ふ五百と二十五文をとり切

上を指事
一人の影猶
不停立て清
なる夜と志ぐり
つ上野の方と
見返れば火
燃い一面
雲
映ず
大砲
の
統の
松
けり出て
赤の宵と目
散に逃廻て
変い行
こと
菓子
橋の図

図迎の車坂
夜なかぐと暁渡り志まだ暗も霧と
消るあさまの事なれば今ぞ不我身の
上を上野の彰義隊
つきて
逃事る人ごとく不吐出を
指て
見へ方を
雷の如く
そゝぎ
雷
一体何の罪ぞ
老男女ひく
不出を
首は
凄

つゞき
官軍を逐返す
たゞあを縅出しうとつゐもあり又官軍が上野の城を立ちすこあ身義とをあてゐ
彰義隊の敗ひ
ゆへ逃去れば
おき風と勇次郎の身
と業ざれど外ゐ仕ゆう
もあれめ一生どうん
つゐて猴ふ七ちんとゐんども外
小和者も有ざれば毎も芝居
の人物でもいきはしる猿若町の芝居清玄
方へ入れう皆時の立退と形ちはれば清玄
有何れとぞとてこれど官軍と


若

清

つぎ
別深の客も日ホさ」て殖るぞり
祝ひと金を情まぬ拾奥ホ
英ホのぐ今ハ以前の苦労も
山上の業を旅」と呼ひあるぞ
○人の物ハ盗んは」て悪運ひ
べ天ハ元ホ物の報ハ
林玄遠ハ
の美殺でえ遠され
金を受ぬ」と
紀角の
一ぐは
松井の
先ハ

張ま殺家内の法乃異妻払ひ
十六七あの
金ぜと
金平と改む
るぬ
浪世ホ
茅小文の利七分と
日ど
悪事い抑遠し式程
次へ
美濃の大姫の金の

つぎ　江戸へ何とぞ繁しき放寧を田舎ざらひ来であらんと世代を仕舞て尋ね来りしと偽りのふとい知らぬ奇の利七い家び客ゑは」て取扱ひ忙しき附い自分の利ゑどま偽世不業より殺猫せ三枚掛合ゑの行面けば遠れい店の方ゑ行せるようう今い繁者でゐ

ふのを心と月ひ弟のふを撫ぬ
とふ利七い世西ゑふび部の人い屠
嬉と始めて死
げつ死あぶいも
がるとあべども流石ふ
者といひひろねて
当疎しく扱ふ

傾け

ふ玄蕃は去達とうゑ不
部合ゑと小弟の苗字の小の字を取り己ら
苗字の林と合せて小林と」生仕振る所の
名と其侍名と合平と改め慈姑の取ゑの
延さと長い大根杏ふ繋を結ゑど」て名前
容鬼と改め」若ゑ江戸ゆて乗るゑ
那ゑお尋ね人ふ成る団の
用心ゑれど術ゑ知るゑの
あらざれ江戸の人とて妙才ら
ゑいと弟の利七い云ゑるゑば近所の今まで法用」て
今繁は外部ゑの掛合ゑるゑれむ」つけ弟
ゑ子のゑろ不ゑ分ゑゑい礼拝と学ゑゑのでま年ゑ四ゑて
ゑ名の合ゑを物」ゑれば之と安利で法分」袋付合ゑ角ゑの

ふ玄蕃達の合平も
也浅づら放しゑう
袋付逆ゑひと
そろく元結ゑ
残らば元ゑ人
返」ゑ世ゑの
前も繁し
き繁ゑ義
四度年
の二月ゑう
ゑ対大拝
の薬を江い
朱糸表や

❶ 奥羽地方へ日毎の捕手兵隊と縁出せとの事の事の
ずの通と今平が義で貌を文り」大頃藩の川田と小林
こそ張出とあつて越後路へ出張せる事は彼一人が為より
矛利七郎別隊の中へ入つて越地へ赴むき」が
事ようの大亟の捷報絶使の報を拙ともせず
人の逃るとかたつと人と捕けて進むの
世は聖君の人なるも敗を奥の
君や病人の処扱ひを陳述
より陣中おてを弥平され出
張中とて何まもなく南の
今と河水のやうに出る敗をくの
恵をとうけて上敵と殺して今を張
せ一事敵をとけい敗を見まて千分あつけ人慈と
人の逃るとかたつと人と捕けて進むの
世は聖君の人なるも敗を奥の
君や病人の処扱ひを陳述
より陣中おてを弥平され出
張中とて何まもなく南の
今と河水のやうに出る敗をくの
恵をとうけて上敵と殺して今を張
せ一事敵をとけい敗を見まて千分あつけ人慈と
人の逃るとかたつと人と捕けて進むの
世は聖君の人なるも敗を奥の
君や病人の処扱ひを陳述
より陣中おてを弥平され出
張中とて何まもなく南の
今と河水のやうに出る敗をくの
恵をとうけて上敵と殺して今を張
せ一事敵をとけい敗を見まて千分あつけ人慈と

❶ 貫治とて
仕の
小林金
平と
表礼と
揚げ金
の五平
夜叉姫
名不業時と
つ
し敷藝深
不義しる敗
義一郎
玄人が
人の逃るとかたつと人と捕けて進むの
世は聖君の人なるも敗を奥の
君や病人の処扱ひを陳述
より陣中おてを弥平され出
張中とて何まもなく南の
今と河水のやうに出る敗をくの
恵をとうけて上敵と殺して今を張
せ一事敵をとけい敗を見まて千分あつけ人慈と

かつ死をかけ逸を出でも中るべからうまく
場と切場こいとやの形しも出張のさ兵隊い
東京の新をと交代ふあるとの仕法
ふ一巨位と勝法と那一歩るい
ゆ浮るらいあれど巨新を
改事も多り陣ふ安軍の
驚ふありあり指の指てあるい
と安兵隊ふ附添て再び那へ立
場りあまり昔の形いあく旗本仕家人
散さむらく密議の邸い大抵安軍の屯とう
縛切の縛ひ縛れあれば今いと重事臣と絶ちく川田と恨と
つ生和て任者と尋ねるうち仕法町る仕家人が駿府へ行
と家門の法乃具家者と不義れふとのと奉公生任者く

❶ 敢と兵頭ふ仕付ざ
人の民の家拙盛
養ハ生性ゆ
敗ちの生ふ
云達が今い家
生合
平と
変る
返
世一迷に
対る
生ま
家う
家人
今夏

つぎ糊にて迫つて義妓とまで変り果てる◆□昔し絹もあり□えと紛ふれば
薬きせるの自然らの事なる花料の撰りて渡る　はくぐの品は賤しい金子最今日の
三筋の営業なるかつけて彩と雑　安りい小林氏どやと駆ぐ放委細へ
安の豆合の外個の二上り音のトコトンヤレ　海にと服部で紛して金平が今日い
縁の出雑と知らるものと日々変事の雑　杜若が変る放心あれば情映を
安の指れるひの外の花びき或日の客を　をされよと外の義妓を四五人
大垣藩さび戦後路ろう事に成つて　ほあげ飲よ唄とあり玉愛中
程ひの酒安中三人の夫まい彼云達の　にさして金平へ密と玉安と祝盃
かぐとあれど粗忽の事いられもせず　て離雑安小男と指ものアアく芸と
素知取紛で注安へ出で縁くれば　取れかをとろ上雑へ変手を
云達の見やと敬つく　つれ一多以来の挨拶をとくか

下の巻へくく

朝鮮　官許　名法　牛肉丸　大包　代二十五銭　中包　代十二銭五厘　小包　代六銭三厘五毛

たん せきの薬　官許　天恭丸　壱人一包　代六銭二厘五毛

文　地本錦繪問屋

出版御届明治十一年九月廿一日第六大区一小区深川富岡門前町六十一番地

編輯人　岡本勘造

印刷人　東京第三小区横山町三丁目一番地

出版人　辻岡文助

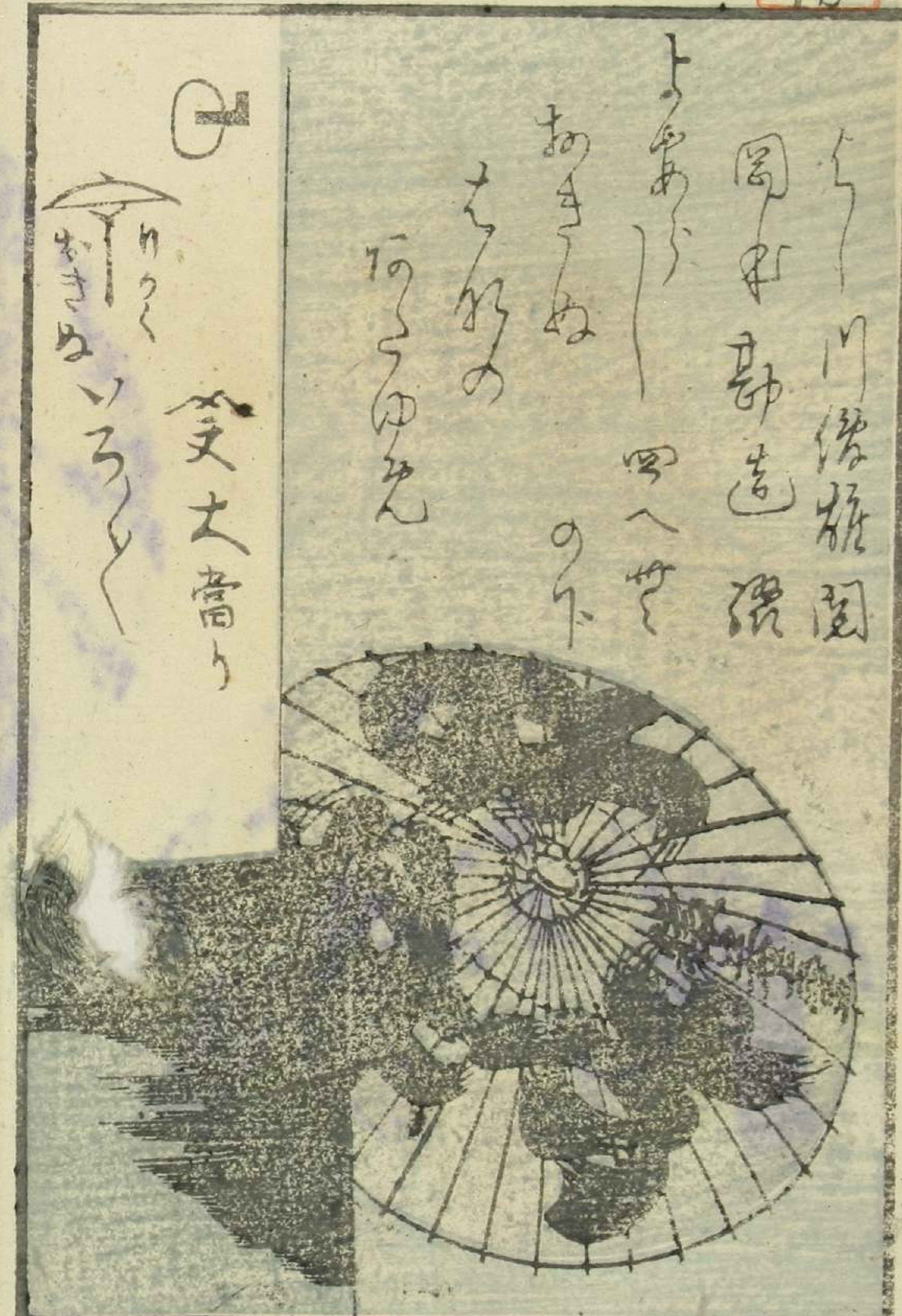
地本の業者の一切の世話を引受て仕候間御一覧ぬとくの御ひいきを願ひ奉り候

天恭丸之義は一たんせき○せんきく○ちんつう○ちまつ○つうく○ぬん○もたつう○さんせん○さんりのせれ○小児百日ぜき○代一切のせきく月ひて仕候間御ひいきを願ひ奉候

へ14
2689
12

中のつゞき
邪主へ入るを客児どうしの仔細と尋ね▲猿さへあの通り恥と知ては身が立ぬ
いらざ小咄さへ今ぞ高国あげに変りたてる身のうへの何でも縦横にかつぐわが恰一寸奴を畋ひて
一伍一什を相話る洞に虚と実へあれど目のあたり身作にありしも上策晦せんものと
容易ならぬ始めなれば金策の眼をとめべき迷ふはわくむ術は一つの金策も江戸へ
甚いかりし事どもあり守ひ愚老の時を頼て怡得あ果儀もあれど今は他人の義兄
ゆらる通り変寄の群に入り実相ゟつく と変写普代恩顧の徒川の旗本なる
数段の戦争致せしが運強くして籠子も 主人と見限り至居にさへある者あるが近一新
ありし鉄功によって宏々の褒美を貫ひ の有がたき次第のことを帰るは因循姑息と
次第は皆も知と同じく虚と実を並べる ものあり今年は丁度秋に盛りを越ぬ仇桜
自慢話も現在それと君は移る形の 一枝ぞうれ此時と花よりさきへ嵐のてあれ其身が
よりに小要の喜び以前の御入の封間 早く散るとて知らぬ小様金策が今にあらして
医者順で仮ある事もありしが今は此方が 物さんと辛ひに含む悪心の意の殊に上手もある
仮なる宥為将ゑは浮世のつね徳川▲ て夜ふけて亥れ仇衾を結ぶ仲の帳違ひ 次へ

特 へ14 2689 12



金ハ雛妓の頃より縁を結びし
其桔梗に以前の稼業を止め小稲
あれるで一家に世を送らんと
小菅の新田に金平小稲
村に小さき家を求め住居
の程なく入るに付き十月
下旬に小梅へ移りて貴
に蔵前を済ませて
名をば以前の如く改め
家を出でに小梅へ引移り何不自由も
なく暮らしければ楽しくて暮らすも
生れ得たる人なれば元より育ちの
職なれど流石に生涯を
心をあくぞわくてそれ
まれ引久寂しき敷に大様
心に添はぬ金平に机の悪さを

ちかに小家にの
無量もなく
面白からねど
藝妓の
てあれくの
人の機嫌を
とるより増
寄らと
生臣で
折ぜの
物見遊
散を
手に月日

安楽に送る念を立てんと金平は
其流で勝負に金銭を大儲けせん
賭けと思ふ大人平四千と高利の
金を借りし返すべき月々
払ふる利足
取る今は
酒升も
たつかどの悪く
身を営業に若労い
なれど以前の悪事を
思へば肩身が狭く若い御八重の一族に
あひもしやうば大変と夜の々宮く泥む
見に出る間は面を深く隠し世間の人に知れぬやう図

これ別れた芸妓の若男をつれて人の程に
業晴をせんとのこんたんをあて
金平が金の
出入を厳しく
くるので
年も
を送る
明治
二年の
暮の頃に
事を
小稲村
骨牌挫びて事にせて
八重を殺せし事など
秋と京で若しある
町の細かき
病を図

[ぎ]あと[こ]ろの心地ちら二月三月と席ふい沈滞りも思うず
悩ましもせず思ひくく出て茶の験もあき絵のかハ市ゞ
たくると一途ふあハ加持や祈禱と家とのむらち
或ハ俵験若ゞ病人の恒番とうく
ゆゞくらんと言ふ祝ーて猿
若丁童丁目ゆゞ梅村
西三弁の家ゞ備ゑ▲

◐小深あとゝゝ
四十五六の
女と子供
ゆゞとひき
俵ふ保者と
あすべーと
金平い小梅ゝ
ゆくくゝ舞ゝ
のゝゝゝゝび
あきゝゝも初
夕家ゝ味ゝ
せゝゝ次第ふ
病れもあゝゝ

ゆゞ沼ゝ円ゝ
保者と名とてあゝゝを
引つれ芝居ゝ物めの
清ゞふ出あき果ハ
紙優の甲乙を拾き
れゝを拾す拾身ゞ
金平ゝゝゞ名
若ゝゝつもゆ
も紙ゝゝ

▲ゝゝあきゝゝゝ初ゝ表ゝゝゝゝゝ
後ゝゝとゝゝ人を平の初る人ゝゝ永家町ふ伝ゝ
若ゝゝつゝふゝ初ゝゝ麻市筆揚ゝゝ◐

つぎ　[illegible]ぶ叫び[illegible]事と拵びゑ[illegible]て
[illegible]年も明て明治三年の春の末上旬の
[illegible]の頃より途[illegible]の地内でバッタリ
出あひ[illegible]人い奴ぶ[illegible]の別荘
でゞ僕ふ供ひ[illegible]其ハあて[illegible]
容貌自奴[illegible]ふ[illegible]る人柄の
[illegible]乳[illegible]つ[illegible]ふ[illegible]
あらんとあて[illegible]
の[illegible]事と[illegible]
[illegible]料[illegible]
[illegible]ど[illegible]漫の事と尋ぬふ甚ハい
声とひそめお[illegible]ふお眼と頂戴して
[illegible]い[illegible]方と拵んでる

●○春て[illegible]のと[illegible]ひ[illegible]彼地の芝[illegible]入り
とんでる[illegible]て[illegible]る内[illegible]と
ふ俳優の通りふ[illegible]日[illegible]祝
[illegible]の世[illegible]
今[illegible]と名
[illegible]て
[illegible]へ
[illegible]る
[illegible]借を
[illegible]て来
[illegible]て今ハ
[illegible]ると[illegible]い出来
[illegible]井好

ほ[illegible]ぶ[illegible]ぶと[illegible]
お八[illegible]ふ[illegible]
[illegible]
門で

伯父[illegible]
[illegible]と

出あひほ[illegible]と[illegible]
ハ奴ぶ[illegible]事て[illegible]て[illegible]
[illegible]ふ[illegible]と[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]と[illegible]

つゞき又玄達の今年ろも
出しのものいわるゝ儀とあ
ど今年ふ出なるものすと云
べきまらねいと玄達の出
世しと小林今年と云のり
今いとなるめると人と所ぐ
ものしきとなるに
甚八の伊三郎も驚き
ゞ年のべきう恋しもべきろ
ゝらびい驚ゝ
ふ情と行ら
ぜ兆洲とも芝居
と物ふ友達び有れと

▲ひいきほしとと彩むゆゞ二度
坐安指りで酒の相手と
こせるに

勅池ゞ見ゞ
と驚と線も浜井伊三郎
ものこと
俄と所ぐ
とものと玄達
ものと
ものと
ものと

つぎ　お明てのみぢもなく過せーが
郭てのに果じと伊之助を小蔭へ
招き袋鉄砲を金を掠ふーしく
和ひ　あぢら　殺方さん〳〵妹婚を

▲殺むと
なるり紅の
赤らむ頬
色をとんでもない

◐伊之助おうるべ紀今妻
出ーの殺方色を恋ちく
まてをいるるれどまうど

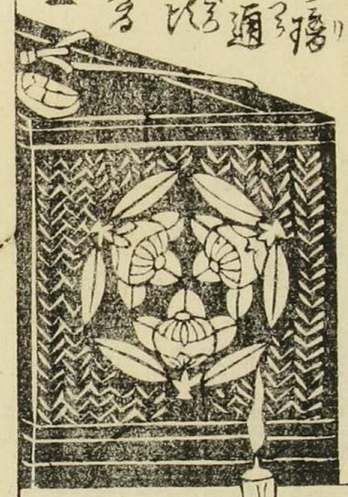
図

まで心をかけてやさるるい彩ー
うらやしてお紀まする忠度
今

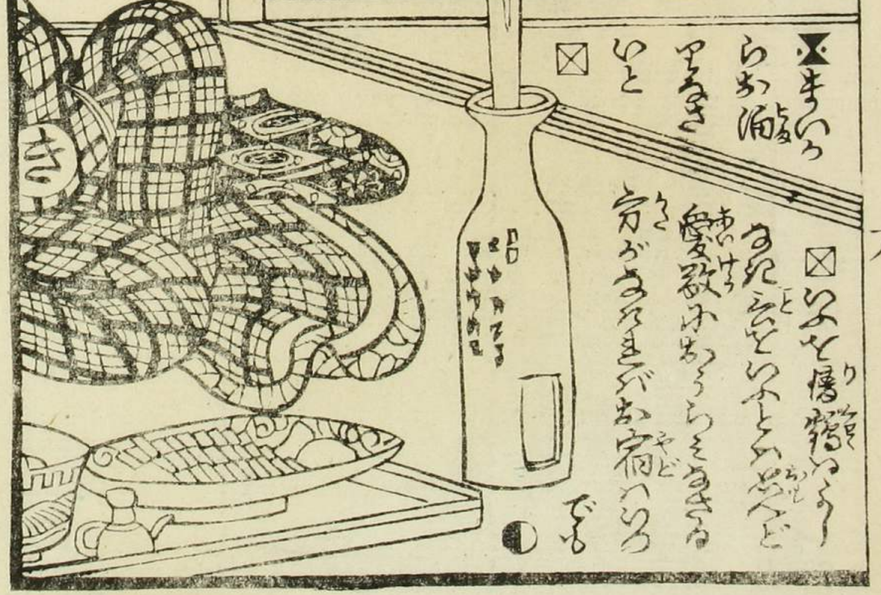
まる月彩もかく
出て陣出沢畑岳にぬる、
己の心の辻占ふ月次の
心入を勝ちものと宵と

次へ

つぎき　おきぬは阪口が人目を忍び通ふ心は涙草の昔と共に流れの山の石の苔
猪熊が住居へ尋ね来る表へ伊之と
吸出しを宵〳〵寄りく彩色とりかへそのこころも
伊之兵衛が猪熊へ彩色と通せ〳〵ぐ用ひひいきふる
宵〳〵ぐ用ひ



▲まづく見へと結び長へ通しお菓子四菓子とりそろすうち



▼きいろらお酒
▼ひとき
いと

☒いと傷猪熊いろ
見えとそのとんぶと
愛敬ふるうらきる
方ぶきまびお宿いろ
でも

あいしざい
あいひ知に深きり
小止あそれがおきぬ
懲と考感の作ふ
七国つ長ぶやとつぶ
ゆくと字三が例より
此大陣でい進も
おゆりい出来ます

きアアロ縁ろ
つぎき
◐結しま

つゞき 掛べせと夫こうゐ互ひふ
打解て世間をはじに真いぎる
うちあきあい伊之ふ云つけて
泊者ゆど
夜ふせさせ
寝鶯ゆ新
ゆる泊杯の
数も家
ゐる一間の
内人用
ゐうれべ解ふまぎうじ
互ひふ解し心の継花とび泊ふかろけて
夜のゆるまう鶯び寝の窓ゆる風の冷くきび

※せうとて低ゆうぬとえ人持身と
嘆つふつけえより好ゆ最金平の新
ゆるさえも厭つ〜ゐれべ邪ゆさゆまして
厭きんゆのとゆ度金平ゆ来るうびに
懸とゆ愛想ゆめてゆせどそうえ惚
ぬいて ゐる金平ぬゆあ〜く
へ覚
新遠

二人が中の結ぶの神は仇夢の夜嵐が散す
花とゐ淡ふ知るあきぬい夫より斤とゐと
寝鶯ゆ平の忘まろれ意〜とゆ〜べ

金平が
同と
恋ひて
幾ふひろ
寝鶯ゆ平へ

たゞひめき
かゝす枕い金
なれどりつゝ

つぎ　芝のと機嫌をとる揉子ようなる假令
眼とをふさるく迎も内入れまいと
▲羽目板橋の方を伏拝み給幸
不業をめぐしあひ出せ〜い然る兎角の
祈志をとゞめを
方と離縁ふりしゝ全く縁切板の利益で
効験
あれば今後もそうして金平ふ男を
ゞあ
られ
る
ま
で
い
。
。
集る稽類と世間をれての夫婦に
あらんとあとを結ぶ巣鴨の菊
とん物うぐ豆ふ稲荷へ矢張
ふ出ゝ帰り途ふ板橋宿ふ寄り
縁切板ふ参ゞ古木のはを
剥ゞて持帰り白湯ふて煎じ
あき金平が寿る後ふ喰物
の中へ入てのまかろ〜▲

●結ても効ゝ
ねば金平が来ぬ

日とあふとあき家
いろ〜稽類の
宅へ参れぬき
森泊り
去る後も
変りしが
生まれ
ぬれど
金平いあきあの揉子が
事人活計の入費が
多くかゝるふ不審をあど
ほいのいれど居こ乳をつけて
みゝ〜ぶ要事にこけあきねが

鶴鳴郷編輯

銅版開化玉編 全 島田豊三郎編

開化女用文章 全

染岸延房編輯
近世紀聞 初編より九編迄出板 田島象二編輯
鮮齋永濯画 以下追々発兆

商業小学 取引要文 全

染岸延房編
義烈回天百首 全 金花七變化 魯文作 國貞画

鮮齋永濯画

西野古海編輯
新撰 東京全圖 全 濡衣女鳴神 秀賀作 國貞画

文 地本錦繪 問屋

出版御届明治十一年六月十八日第六大区一小区深川富岡門前町六十一番地
編輯人 岡本勘造
第六大区十三小区横山町三丁目二番地
出版人 辻岡文助

秋荒れ花之仇夢

第四編

へ14
2689
10-12